

『ねじまき鳥クロニクル』における「忘却の穴」をめぐって

松 枝 誠

序章

村上春樹は『ねじまき鳥クロニクル』執筆後、一九九五年七月に行なわれたインタビューを自らの手でまとめた、「メイキング・オブ・『ねじまき鳥クロニクル』」の中で、この小説を主人公である「僕」、妻であるクミコ、その兄の綿谷ノボルの三者からなる話であるとし、大筋として、「僕」がノボルからクミコを取り戻す話であるとする。村上は、その綿谷ノボルについて次のように述べている。

それは全力で闘い、叩きつぶさなくちゃいけないものなんです。それはいったい何なのか、ということこそ、僕はこの小説を書きながら、ずっと考え続けてきたんです。

村上はこうした人物をこれまでの小説では「語らないようにしてきた」と言い、しかしこの小説には「どうしても必要」なものであったとする。そしてノボルが小説内で行使する暴力を「歴史」に由来するものであり、それは「ノモンハン戦争と日中戦争に関する本」を「読んでいるうちに、僕の書きつつある小説の像と、綿谷ノボルの人物像が少しずつ、霧が晴れるみたいに明確になってきた」と説明する。つまり、ノボルによって行使されている暴力とは、「ノモンハン戦争」や「日中戦争」といった「歴史」に直結するものであり、その延長上に彼の暴力が位置づけられている。

そこで本論では綿谷ノボルに対する考察を出発点とし、ノボルの暴力が特にマス・メディアという媒体を通してどのように行使されているのか、又その暴力とは村上の述べる「歴史」とどのように関わっているのか、逆にノボル自身が「歴史」に依拠せざるを得ない暴力とはどのようなものであるのか、といった点を明らかにしていく。その際注目されるのは、井戸と同様にテキスト自体に穿たれているともいえる「穴」である。この「穴」を広げ、隠されているものを開けることが本論の目的となる。そして、作者が綿谷ノボルを通し描かざるを得なかった現在における暴力―「歴史」認識を解き明かしていきたい。

一章、綿谷ノボルとは何か？

『ねじまき鳥』の中で中心人物とされる綿谷ノボルは、「優秀な私立高校から東大の経済学部へと進み、優等に近い成績でそこを卒業し」、「イエールの大学院に二年間留学し、それから東大の大学院に戻った」という経歴を持ち、三年前に経済学についての本を出版し、一躍「時代のヒーロー」になった。その本の出版後は、テレビの討論番組のレギュラー出演者にもなり、マス・メディアと共棲関係を続けている。「僕」からすれば綿谷ノボルとは、「実体」のない人物であり、「一貫性」を欠き、「深い信念に裏づけられた世界観」を持たない人物として映る。し

かし、彼の語る言葉は「大衆の感情を直接的にアジテート」するものであり、「僕」は「かなり知的に洗練された人たちまでが、彼のアジテーションに動かされるのを見て驚くことになる」。

それではこの綿谷ノボルが力をつけていくことになるマス・メディアとはどのようなものとして描かれているか。初出のみに描かれている部分であるが、ノモンハン戦争を経験し、現在は占い師である本田が見ているテレビ（NHK）は、「人々の深層意識をしつかりと支配」するものとして捉えられ、そのアナウンサーは「人々の正当な感覚を人為的に磨耗させることによって、社会の不完全さが彼らに与えるさまざまな種類の痛みを消し去ろうと試みている」ものとして描かれる。テレビという装置、つまり「アナウンサーの喋り方」や「巨大画面と大音量と正確なアクセントと常套句の限らない反復」が、「人々の正当な感覚を人為的に磨耗させ」、人々の間にある差異を隠蔽し、均等化していくというように述べている。このNHKのニュースは第三部でも次のように描かれる。

僕にとってそれらのニュース映像はすぐリアルであり、また同時にぜんぜんリアルではなかった。僕は事故で死んだその三十七歳のトラックの運転手に同情した。誰も大雪の旭川で内臓破裂で苦しみながら死にたくはない。でも僕はその運転手を個人的には知らなかったし、その運転手も個人的には僕を知らなかった。中略 ただ人間の身に唐突に降りかかる暴力的な死に対して、一般的に同情しているだけだ。⁴³⁸

NHKのニュースによつて「大衆」である見ず知らずの「日本人」は結びつき、訓練され、一般化されるのである。つまり、テレビというメディアは「日本」という「想像の共同体」を形成することにもなるのである。

二

綿谷ノボルはこうしたテレビを代表とするマス・メディアを介して、「ゲーム」でしかなかった彼の「思考システム」を用い「大衆を喚起」させる。そして「大衆」は「テレビの画面の上で繰り広げられる知的闘剣士の試合」を求めるようになり、「そこで派手に流される赤い血」を欲する。「大衆」は綿谷ノボルによるメディアでのメッセージに支配され、「アジテーション」される。

「僕」は上記引用部のように、ノボルにより「アジテーション」を受けない人物であるが、それは綿谷ノボル（マス・メディア）による暴力を感じ取っているからであるといえる。逆に「大衆」は綿谷ノボルによる暴力を暴力として捉えず、容易に同一化することから、同一化し得ない他者に暴力をふるうことになる。それゆえ、「アジテーション」を受け入れない「僕」は排除、暴力の対象となる。

綿谷ノボルによる「アジテーション」の具体的な内容は、彼が選挙に出馬表明する直前に「談話」という形式で雑誌に掲載されている。²⁷⁹²⁸⁰ノボルの「長期的戦略」が「目標」とするものは、「十五年先」つまり「二十世紀のうちに」、日本という国家の明確なアイデンティティーの確立を図るというものである。それも「日本という国家」に基づいた「明確なイメージ」を持つ「国民的、国家的コンセンサス」である。つまりここでも、先述のテレビでのニュースと同様に、綿谷ノボルは「日本」という「想像の共同体」を「世間」に普及させているといえる。

ノボルのこうした思想は、彼を「溺愛」し、「きわめて多くのものを彼に要求した」、両親の思想を引き継いだものだといえる。彼の父親は、「日本という社会の中でまっとうな生活を送るためには少しでも優秀な成績を取って、一人でも多くの人間を押しつけていくしかないという信念の持ち主」であり、「僕」に対しても「人間はそもそも平等になんか

作られてはいない」とする自説を披露する。¹³⁵彼の思考も愛国的な国家に基づいた思想であるといえるが、ノボルの先述の談話よりも、そのナショナルなものの故の排他性が非常に強く出ている。彼の認識する「日本という国」は、「弱肉強食」に基づいた「エリート」主義の「階級社会」であり、そのため彼も「エリート」になることを望む。つまり、日本という国家を愛し、それを維持するために無批判に他者を排除する。

第三部ではノボルの源流が彼の伯父にまでさかのぼる。ノボルは、伯父から聞いた満州での石原莞爾による「兵站線の思想をモデル」とした、「地域経済について地政学的」な論文を発表している。²⁸⁵ノボルの論文によれば、石原による兵站とは、満州国を「アジア国家の新モデル」とし、「究極的には対ソビエト戦のための、ひいては対英米戦のための兵站基地」とするものである。

石原のこうした思想が明確に示されているものは、一九三一年五月に書かれた「満蒙問題私見」である。これは、「戦争計画八政府及軍部協力策定スヘキモノナルモ一日ヲ空フル能ハサルヲ以テ率先之ニ当リ速ニ成案ヲ得ルコト」とあるように、同年九月十八日に決行された柳条湖事件を引き起こし、それ以降の満州国体制を築く基本となるものである。そこでは石原独自の思想である「最終戦争」のために「東洋ノ選手タルヘキ資格ヲ獲得スルヲ以テ国策ノ根本義トナサルヘカラス」というように、「東洋」の獲得とその安定化をにらんだものとなっており、「満蒙」の政治的価値として、「朝鮮統治」の安定化、「支那」の指導が掲げられる。つまり、「満蒙」を日本の「領土」とすることにより、ソ連を牽制し、朝鮮を安定化し、中国進出を図るというものである。しかし、「支那問題満蒙問題八対支問題ニ非シテ対米問題ナリ」とあるように、これはその先のアメリカとの「最終戦争」を見据えたものであった。

ノボルが論ずるように石原が兵站（新生満州国の急速な工業化、自給自

足経済の確立²⁸³）を重視するのは、石原独自の「戦史研究」によるもので、決勝戦である「最終戦争」の前の準決勝である「欧州戦争」（第二次世界大戦）を、「消耗戦争」（殲滅戦争）が軍隊を目標としたのに対し、「消耗戦争」は土地を目標とする）と位置づけていることから推測できる。「満蒙ニ関スル私見」では、「満蒙」の「富源」に関し、次のように述べている。

満蒙ノ確保ハ露国ノ極東攻勢ヲ断念セシムルニ足ル戰略上ノ大利益ヲ我国ニ与フル外其富源ノ開発ハ我国現下ノ行詰リヲ打開スル為相当ノ効果アルヘシト雖前記対米大決戦ノ為ニハ少クモ山西ノ石炭河北ノ鉄河南山東以南ノ綿ヲ利用スルヲ要スルノミナラス東亜諸民族ヲ率テ此ノ大事業ニ参加セシムルノ抱負経綸ナカルヘカラスこの兵站に関する計画は、その後ソ連の五カ年計画に対抗するものとして、「重要産業五カ年計画要綱」（一九三七年五月二十九日）として具体化され、正式に陸軍省案として決定されている。こうした兵站に対する石原の思想を松沢哲成は次のように述べる。

圧倒的な、しかも限定的な軍事勝利であった石原莞爾の満州事変。奥地へ奥地へと戦闘ごとに延びる作戦終末線によってついに「泥沼」と化した、石原なき日中戦争。その対象はあまりにも鮮やかである。日中戦争は、日本軍の包囲殲滅企図―中国軍の後退戦術―日本軍の追撃、というパターンを繰り返しつつ拡大して行った。中略このような見方からすれば、石原莞爾は昭和陸軍の主流とは明瞭に異なっていたのである。

このように松沢は、石原を批判しつつも彼の兵站思想には一定の評価を下している。これは綿谷ノボルの意見とも一致する点である。

それでは、石原（もしくは日本軍）によるこうした「満蒙領有計画」が正当化できる根拠はどこにあったのだろうか。石原は「満蒙」は、領

土的、民族的、さらに経済的にも「漢民族」、「支那」以上に密接なものであるという認識を示していた。それゆえに「滿蒙領有計画」は正当化されるものであった。しかしここには明らかな飛躍がある。「滿蒙」が日本に密接であること、さらに「滿州蒙古人」が「大和民族」と密接であること、さらに「滿蒙」における経済的な優位性は日本がその土地を領有することにはつながらない。つまり、石原らの述べる「中国人」及び「滿州人」、「蒙古人」には、徹底して他者という視点が欠けている。日本にとつての中国人とは、石原らが述べる「中国人」でしかありえなかった。そうした性格を典型的に示している政策が、ノボルの伯父が石原から直接にその「重要性」を説かれることとなる「日本からの農業移民」政策である。²⁸³

滿州に向けての農業移民が最初に派遣されたのは、「試験移民」の段階ではあったものの、一九三二年十月のことであり、それは日本国内の移民推進者の見解と、「現地」である同年三月に建国された滿州国の關東軍との利害が結合した結果であったといえる。日本国内における農業移民の積極的な提案者である加藤完治を中心とした拓務省は、滿州移民を国内の貧農の救助策と考えており、それに対し「現地」滿州では、東宮鉄男を中心とした關東軍が移民の最大の役割を現地の治安維持と考えていた。彼らが最初に会談を行なったのが一九三二年の七月十四日であり、その会談によって、「日本人農業移民選出・入植のための具体的措置が協議され、そこでの協議・了解事項は、すべて關東軍司令部によって承認された」。石原莞爾は、その会見を仲介し、加藤と東宮を結びつけた張本人である。

この滿州移民政策は、表向きは「日滿両国国防の充実、滿州国治安の維持並日本民族の指導による極東文化の大成を図」り、「移住地に於ける内地人及鮮人の融和聯絡を図」という「五族協和」、「共存共栄」と

いつた滿州国の建国理念に沿ったものであったが、そこで実際に行っていたことは、日本の植民地体制を政治的・軍事的に補助し、強化することとでしかなく、移民のための耕作用地は、原住民の使用している既耕地を「強権的・暴力的」に取り上げるものであった。こうした動きに対して、現住農民は反滿抗日体制を整え、次第に「共匪」として組織化されていき、「滿州治安の最大の癌」となる。この「共匪」に対して日本、滿州国側は「匪民分離」工作・集團部落の建設」によって対処するが、「余り成功しなかった」。それは、「共匪」を生み出す根本的な問題が、移民政策を含めた「滿州植民地化政策」にあったからである。つまり日本は、「滿州治安の最大の癌」である「共匪」を自ら生み出し、対日に向けての体制をより強化させ、それに対して圧倒的な暴力を行使していたといえる。これが綿谷ノボルが「モデル」とするところの石原の思想であり、「他の諸国（日本を除いた他のアジア諸国―松枝）は彼らが西欧諸国から解放されるために日本に協力する義務がある、と彼（石原―松枝）は信じていた」、²⁸³という思想である。

石原莞爾を師とした伯父の「政治的地盤」を引き継ぐことになる綿谷ノボルは、こうした思想地盤をも引き継いでいるといえる。彼の「アジテーション」における目的である「日本という国家の明確なアイデンティティーの確立」とは、日本からの滿州移民同様、「日本」、「日本人」という主体を構築し、その途上で排除される他者を必然的に伴うものである。それは、ノボルが「僕」を「ただのゴミや石ころ」と呼ぶことによって貶め、そのことにより自らの優位性を確立させていることから立証される。そしてこれも石原同様、ノボルは他者を排除することに対してきわめて「無知」であることが指摘できる。これはもちろん日本からの滿州移民、つまり「大衆」一人一人にもあてはまることである。つまり、石原―滿州移民と同様に、綿谷ノボル―「大衆」という

メディアには「無知」になることが求められているのである。

つまり、ここで注意せねばならないのは、日中戦争における「大衆」の被害者性以上にその加害者性である。「僕」が、綿谷ノボルにアジテーションされ「テレビの言うことをそのまま信じている」人々に襲われるように、日中戦争、又満州への移民計画において現実侵略を行なったのは「大衆」に他ならない。彼らは石原らの主張に「無知」に同一化することにより「日本人」となり、自らが考える「中国人」に当てはまらない人物に暴力を行使するのであった。綿谷ノボルは暴力的に「日本人」を形成し、「日本人」にならない者、なりえない者を排除、隠蔽するのである。それでは、次に『ねじまき鳥』の中で「大衆」が「無知」になる姿勢を考えていきたい。そしてそのための装置として描かれる穴という事例を主要登場人物である笠原メイから見ていく。

二章、「忘却の穴」、もしくは記憶について

笠原メイは、十六歳の高校生であり、バイク事故（同乗のボーイ・フレンドは死亡）によってけがをしたため、学校を休んでいる。第三部でかつらを作る工場で働くことになる彼女は、自分の状況を「回復のトジョウ」という言葉で表し、その「回復のトジョウ」でそれまで思い出すことのなかったバイク事故の記憶について「思い出すように」なっている。メイのバイク事故に対する記憶とは、それまで「僕」とのあいだでは三度話題になっているが、一度目は「どうでもいいことみたいに」語られ、二度目でも「話す気にはなれな」く、三度目でも死んだボーイ・フレンドのことが話題になることはなかった。

メイはその記憶を思い出す際、「自分について考えないことでぎやくに自分の中心に近づいていく」、つまり「ほんとうの自分」に近づいて

いる¹⁹⁴と感じている。彼女は自分について考えず、自分と「結びついてるもの」（「ねじまき鳥さん」、「路地」、「井戸」、「柿の木」、「自分の手で作ったかつら」、そして「死んだ男の子」）のことを「ちよつとずつ思いだすこと」によって、そういうものの「いるんなちよつとしたものの助け」によって「こつち」へ、つまり「ほんとうの自分」へ「戻ってくる」ことができる¹⁹⁵と考えている。つまり、メイが「ほんとうの自分」になるためには、自分以外のものとの関係又は過去の記憶を思い出すことが必要となる。言い換えると、笠原メイは自分が他者との関係、過去との関係によって成り立っているというここに気がついていく。他者との関係、過去との関係を忘却した時に現われるもの。それが一章で示した「無知」になることを求める「綿谷ノボル」であるといえる。つまり、笠原メイは自らの中に存在する「綿谷ノボル」に気づき、傷ついている存在である。そのメイを救うものが自分と「結びついてるもの」、中でもボーイ・フレンドの記憶である。

ボーイ・フレンドの記憶がよみがえる瞬間は、次のように描かれている。「とくにアタマをからっぽにしてベースに髪の毛をせっせと埋め込んでいるときなんか、ミヤクラクなくそういうのがはつとよみがえってきます。そうさそうさ、こうだったんだって」²⁰⁰。つまり、過去の記憶は過去にのみ属するものではなく、現在に影響を及ぼすものである。メイの言葉で述べるなら、「時間というのはA B C Dと順番に流れていくものじゃなくて、ときとうにあつちに行ったりこつちに来たりするもの」であるのだ。メイの想起するボーイ・フレンドの記憶は、過去の出来事ではあるが、それが隠蔽されていた状態から、今、ここにおいてメイに対して起動し、作用する。そしてその記憶は、「回復のトジョウ」へとメイを導くことになる。

忘却された記憶、言い換えるなら排除された他者とは笠原メイの

内にあったものである。それは「他者」として、メイにとって「どうでもいい」ものとして存在することによって、過去にとどまっていたのである。つまり、メイは「無知」になることによって、それらの記憶を閉ざしてきた。しかし、その記憶とは過去にのみ属するものではなく、現在、そして未来へともつながるものである。それゆえ、その記憶を過去から現在へ取り戻した瞬間に、メイには「回復のトジョウ」という可能性が現われたといえる。

メイはここで「穴」という比喻を用いて、こうした記憶を忘却し隠蔽する装置を説明している。

うまく思い出せない。事故のときにちよつと頭を打ってそれで脳の配置が乱れちゃったのかもしれない。あるいは精神的なショックで、いろんな記憶をさつとどこかに隠してしまう癖がついたのかもしれない。リスが穴を掘って木の実を隠して、そのまま埋めた記憶を忘れてしまつたみたいだね。²²³₂₂₄

ここでメイが語るのは、記憶を穴に埋めることによって忘却し、そしてそのこと自体を忘却するという二重の忘却といえるものである。つまり、忘却したことを忘却しているのである。その二重の忘却により、メイは「無知」になり、そこに安住することができたのである。

『ねじまき鳥』第三部では戦時中に「穴」を掘り、埋めるといった行為がなされたことが二箇所描かれている。一つ目は、赤坂シナモンのコンピュータに入力されていた「ねじまき鳥クロニクル 8」とされる、獣医であった赤坂ナツメグの父親が終戦直前の新京の動物園で体験したと思われる話である。²⁸

そこで描かれる穴とは、日系指導官を殺害し脱走した満州国軍の中国人が、日本人軍人によって処刑される際に、中国人自身が掘った「墓穴」

である。その八人の中国人は、脱走の際に軍服から野球のユニフォームに着替えており、内四人はすでに射殺され荷車に「荷物」として積み、生きている者もユニフォームの背番号（1, 4, 7, 9）で呼ばれている。彼らは日本人中尉の命令によって穴を掘られ、死んだ四人の中国人をその穴の中に放り込む。そして生きている彼らのうちの三人（背番号1, 7, 9）は弾丸節約のため銃剣で兵隊に殺され、背番号4は若い兵隊により野球のバットで後頭部を叩き砕かれて殺害される。

ここで描かれている処刑は方法的にも非常に残酷で残酷なものであるといえるが、奇妙に平板化されたものであるという印象を受ける。それは、殺される側の人間が「荷物」として表され、背番号で表示されていることからわかるように、非常に残酷な処刑方が用いられながらも、殺す側のみしか描かれず、殺される側が全く描かれていないからであるといえる。逆に言うところ、処刑される中国人が日本人にとって「荷物」であり、数字（背番号）であつたがために、こうした残酷な殺害を行うことができたのだと言える。

しかしこうした一面的なあるいは安定的な殺害状況の中に、突如他者が侵入する場面がある。それは、背番号4の男が殺害され穴に落とされる際に、獣医の腕を突然つかみ、同時に穴の中へ引きずり込む場面である。³³⁶₃₃₇

ちようどそのとき、中国人の四番バッターは目を覚ましたようにさつと身を起こし、何の迷いもなくと人々の目には映った。獣医の手首を掴んだ。すべては一瞬のうちに起こった。獣医にはわけがわからなかった。この男は間違いないで死んでいたのだ。しかし中国人はどこからか吹き出してきた生命の最後の滴りによって、まるで万力でしめあげるように獣医の手首を握りしめていた。そして目がかつと見開いて黒目を上に向けたまま、獣医を道連れにするような

恰好でそのまま穴の中に倒れこんだ。

ここでふいによりみかえる中国人は「荷物」や背番号4で示されるようなものではなく、獣医にとって「わけがわからな」いものとして現われる。つまりそれまで数字で表すことのできたものが、「わけがわからな」い、他者として出現することになる。しかし、その中国人は中尉によって再び殺され、穴に埋められる。中尉が行うこの再殺害は、「荷物」、背番号4として死んでいく中国人の抵抗に対する暴力的な隠蔽であるといえる。見てしまったものを、見ていないものとする二重の隠蔽である。

しかし同時に、ここで重要なのは、埋められ、隠蔽された他者は、物質的には存在しないものへと変化するといえるが、獣医のつかまれた腕の「五つの指のあと」として、又「あの男はほんとうに、真剣に、俺をどこかに一緒に連れていこうとしていたのだ」と感じる「冷氣」として獣医の中に残るであろうということである。中尉にとって「初めて」「人間に向けて銃を撃った」感触として残り、若い兵隊にとって「握りしめたまま」でいたバットの感触として残るであろうということである。

二つめの穴は、間宮中尉からの手紙に記述されていたシベリヤ収容所での廃坑の竪穴である。³⁹⁷³⁹⁸ 過酷な強制労働による死者、又見せしめの為に殺される者は、「竪穴の廃坑に放り込まれ」る。ここでも死者が埋められる穴は「墓穴」として表示され、ときには生者さえも埋められるという収容所での暴力が剥き出しになる装置として働いている。そして石灰がまかれ、「上から蓋を」された「臭いもし」ない「墓穴」は、存在しなかったものとして忘却される。しかしここでも確実に残るものは存在する。それは、間宮が今も「聞くことができ」という、埋められた者の「悲痛な叫び」である。それはたとえ死体そのものが消えてなくなってしまうとしても、四十年以上経過しても間宮に届くトラウマともい

える「叫び」である。

ハンナ・アーレントは『全体主義の起源3』の中で「全体主義警察の最も重要な、最も困難な任務の一つ」として、「死者と同時にその形見をも消し去ること」を挙げている。つまり、「全体的支配」においては、「望ましからぬ者や生きる資格のないものは、あたかもそんなものは嘗て存在したことがなかったかのように地表から抹殺」してしまわねばならない。そのためには、「彼らが後に残す唯一の形見」である「彼らを知り、彼らを愛し、彼らと同じ世界に生きていた人々の記憶」すらも「抹殺」せねばならない。アーレントはこうした行為を実行した「警察管轄下の牢獄や強制収容所」を「忘却の穴」と呼ぶ。

それらは、誰もがいつなんどき落ちこむかもしれず、落ちこんだら嘗てこの世に存在したことのなかったかのように消滅してしまう忘却の穴に仕立てられていたのである。中略 一人の人間が嘗てこの世に生きていたことがなかったかのように生者の世界から抹殺されたとき、はじめて彼は本当に殺されたのである。

「忘却の穴」が完成するには、彼自身の肉体、記憶すべてを抹殺した後、彼を知る他者の「記憶」もすべて抹殺されねばならない。

つまり、『ねじまき鳥クロニクル』における「忘却の穴」(メイの穴、動物園の穴、シベリヤの廃坑)は、完全なものではない。それは記憶として継承されているからである。それは現在も突然現れ得る他者であり、「冷氣」や感触といったものであり、又「叫び」であり、かすかな痕跡といえるものである。それがなぜ、記憶として継承されているのか。それは穴に埋められ忘却された他者が、忘却されることに対し抵抗を繰り返しているからである。忘却という暴力に抗し、自らの存在を叫んでいるからである。その抵抗に対し、再殺害するのではなく、応答すること。彼らの「声にならない声」³⁶¹を聞き取るうとすること。それが我々を自らの

中にも存在する「綿谷ノボル」＝「無知」から救うものに違いない。

結論

日中戦争において、死者（時には生きた者も）を穴に埋めることによって「日本」軍が虐殺を行い、侵略したことをここでは触れることはできないが、『ねじまき鳥』が時系列的にも、浜野軍曹による南京大虐殺から始まっていることに注意せねばならない。

間宮徳太郎がハルハ川を渡り、外蒙古に侵入するのは、「昭和十三年四月の終わり頃」であり、ちょうど南京大虐殺が終了した直後にあたるといえ、同行する浜野軍曹によってもその事件は語られる。

南京あたりじゃいぶんひどいことをしましたよ。うちの部隊でもやりました。何十人も井戸に放り込んで、上から手榴弾を何発か投げ込むんです。その他口では言えんようなこともやりました。²⁶⁰²⁶¹

彼は、南京大虐殺に参加した兵士であり、彼の語る食料の「略奪」、「匪賊狩り、残兵狩り」は、日本軍による南京への侵攻の途上で発生したことを元になっていると考えられる。

この南京大虐殺は、「一九七〇年代から八〇年代末にわたり、歴史的事実が「虚構」「まぼろし」かめぐつていわゆる「南京大虐殺論争」が展開され、家永教科書裁判の争点にもなったが、いずれも否定論が敗れた」という経緯があるにも関わらず、「新しい歴史教科書を作る会」による教科書記載の問題、また未だに繰り返かえされる全面否定に対する問題が残存している。²⁶²

『ねじまき鳥』においてこうした人々は、笠原メイの両親もしくは「世の中の人々の多く」として描かれる。メイは「僕」に対する五度目の手紙の中で「茶碗むし」を例に挙げ、両親の「一貫性」を主張する思

考について次のように述べている。

私の雨蛙みたいな両親は、もし「茶碗むしのもと」を入れてチンしてマカロニ・グラタンが出てきたとしても、たぶん「自分はきつとまちがえてマカロニ・グラタンのもとを入れたんだな」と自分はいきかせたりするんじゃないかな。あるいはマカロニ・グラタンを手にとって、「いやいや。これは一見マカロニ・グラタンに見えるけれど実は茶碗むしだ」と一生けんめい言い聞かせたりするかもしれない。²²⁴²²⁵

ここでの両親の思考とは、「一貫性」を持つことを正当化したいがために、過去の記憶を塗り替え、もしくは現在の事実を直視したくないがために、今起こっていることを歪曲しているものである。

浜野により井戸に放られ、沈黙させられ忘却された死者は、「他者」としての「中国人」として認識されている（あるいは認識すらされていない）。彼らが未だに「中国人」でしかないのは、「一貫性」＝「日本人」でありたいがためである。しかし彼らはここまで述べてきたように「声」として、あるいは継承される記憶として、他者としての「中国人」として到来している。彼らを「中国人」として捉える時に、「われわれ」「日本人」は「日本人」として「ほんとうの自分」として「回復」できるのではないか。しかしそれは何度も述べるように、単一の普遍なものではなく、メイが述べるように「いろんなちよつとしたものの助け」によって成り立っている「回復のトジョウ」としかいえないものである。

綿谷ノボルは物語の最後に「僕」によって次のように定義づけられる。「そして彼は今その力を使って、不特定多数の人々が暗闇の中に無意識に隠しているものを、外に引き出すようにしている」。⁴⁵⁹ 綿谷ノボルとは、「日本人」としての欲望を満たすためのメディアであった。「日本人」が「無意識に隠している」暴力性を引き出すためのものであったのだ。そ

れは「日本人」ということの暴力性に他ならない。彼らが「日本人」であるために、他者を排除、隠蔽し、そのことに對し「無知」になるという構造である。それは戦前から現在まで持続されている。

『ねじまき鳥』はこうした構造に對し、穴の底からの他者の声を聴く、といったことに賭けられた小説ではないか。その他者からの声が「日本人」であることを疑い、思考させることを読者に強いるのである。

注

『ねじまき鳥クロニクル』からの引用はすべて新潮文庫（一九九七年十月）による。引用文以下の（）内は、部数、及びページ数。

「メイキング・オブ・『ねじまき鳥クロニクル』」（『新潮』一九九五年十一月）

「連載第二回」（『新潮』一九九二年十一月）P 408下段L 22～P 409上段L 3、P 409上段L 8～L 14

ベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』（白石さや・白石隆訳、NTT出版、二〇〇〇年二月、初出：“Imagined Communities” 1983）の中で「出版資本主義」が「想像の共同体」に与えた影響として、「出版語」による「特定の言語の場」の創設、「言語に新しい固定性を付与した」こと、「権力の言語」の創造を挙げている。こうしたことは出版の延長としての新しいメディアであるテレビにも当てはまり、『ねじまき鳥』におけるテレビニュースにも当てはまる。

「もし彼（綿谷ノボル・松枝）がその気になれば、僕を完膚なきまでに叩きのめすことだってできた。彼がそれをやらないのは、ただ単に彼が僕に對して関心というものをまったく持っていないからだ」た（148）

石原莞爾「滿蒙問題私見」（『太平洋戦争への道 開戦外交史 新装版 別巻 資料編』（朝日新聞社、一九八八年一月））

石原『最終戦争論』（中公文庫、二〇〇一年九月、初出：『世界最終戦争論』（一九四〇年、立命館出版部）。「最終戦争」とは、「世界歴史の運

命」として、「国家」は「一つの連合体」になるべきであるという前提に基づいたものである。その国家連合とは、「第二次欧州戦争以後は恐らく日、独、伊即ち東亜と欧州の連合と米州との対立となり、ソ連は巧みに両者の間に立ちつつも、大体は米州に多く傾くように判断されますが、われわれの常識から見れば結局、二つの代表的勢力となるものと考えられ、それが準決勝で優勝戦に残るかと言え、私の想像では東亜と米州だろうと思います」というようなもので、最終的には日本とアメリカとの間で「最終戦争」が行われるものとする。（綿谷ノボルの伯父の述べる「最終戦争」は「西欧戦争」であり、石原のものとは異なっている。）

「滿蒙二関スル私見」（一九三三年八月二十三日）（前掲『太平洋戦争への道 開戦外交史 新装版 別巻 資料編』）

松沢哲成『日本ファシズムの対外侵略』（三一書房、一九八三年八月）

石原莞爾「現在及将来ニ於ケル日本ノ国防」（一九二七年）（前掲『太平洋戦争への道 開戦外交史 新装版 別巻 資料編』）

ここでの中国人とは伝統的な真正な中国人を指すものではない。あくまで他者としての複数の中国人である。

浅田喬二「滿州農業移民の立案過程」（『日本帝国主義下の滿州移民』龍溪書房、一九七六年十一月）

「滿州に於ける移民に関する要綱案」（一九三二年九月十三日、特務部）（『近代民衆の記録6 滿州移民』新人物往来社、一九七六年五月）

田中恒次郎「滿州」における反滿抗日運動の研究」（緑陰書房、一九七七年十一月）

蘭信三「滿州移民」の歴史社会学（行路社、一九九四年二月）

浅田喬二「増補日本帝国主義と旧植民地地主制」（龍溪書房、一九八九年五月）

来民開拓団の先遣隊の一員である谷川竹行は、実際の滿州での開拓政策を次のように述べている（注22）。

はじめ、荒野を開拓するつもりでした。それが行ってみると、すでに、もう土地、家屋、全て関東軍の方から買収済みで、農地から住宅全部を買い上げてあるもんですから、もうそのままの形で入植するというので、びっくりしたですよ。一番苦労したつは、

買収した後、家屋から現地の人を移転することでした。それが一番苦勞したです。県から来て追い出したが、後ろに関東軍があるもんだけん、抵抗もでけん、しょんなしゃ出て行きよったですもん。

満州開拓団はこのように関東軍に騙されたという面も実際にあるが、しかしそのことで利益を得ており、原住民を搾取した点において、一人一人が罪を免れることはできない。

ハンナ・アーレント、大久保和郎・大島かおり共訳『全体主義の起源 3』（みすず書房、二〇〇一年五月、初出：『THE ORIGINS OF TOTALITARISM Part Three Totalitarianism』1951）

例えば万人坑といった問題（老田裕美「日本の中国侵略における華北」〔戦争犠牲者を心に刻む南京集会編『中国人強制連行』東方出版、一九九五年十月〕）。

村上が南京大虐殺について言及している資料は他に、『酒鬼薔薇』事件について（『CD-ROM版村上朝日堂 夢のサーフシティー』朝日新聞、一九九八年七月）。万人坑についても『ねじまき鳥』1・2部執筆後、『ノモンハンの鉄の墓場』（『辺境・近境』新潮文庫、二〇〇〇年六月、初出：『マルコポーロ』一九九四年、九、十、十一月）で述べている。

笠原十九司「南京事件」（『歴史学事典 第七巻』弘文堂、一九九九年十二月）

②① 笠原十九司『南京事件と日本人 戦争の記憶をめぐるナショナリズムとグローバリズム』（柏書房、二〇〇二年二月）

②② 「来民開拓団に思う―先遣隊の一人として―」（『満州移民と被差別部落―融和政策の犠牲となった来民開拓団―』（大阪人権歴史資料館、一九八九年七月））

（本学大学院研修生）